

理事長あいさつ

武田（司会） 開会に先立ちまして、主催者であります日本GAP協会を代表しまして、理事長の片山より開会のあいさつを一言申し上げたいと思います。

よろしく願いいたします。

片山（日本GAP協会理事長） 青森のリンゴ生産者の片山と申します。

2003年の3月、私がわけもわからずEUREPGAPの審査を受けて落第してから、今月でちょうど5年たちます。この5年の間に、GAPに関するさまざまな実践、さまざまな議論が日本国内でもなされてまいりましたが、現在、必ずしもGAPに対する統一的な見解もしくは統一的な方向性が確立されているとは言えない状況でございます。GAPに関しては、さまざまな意見、メリットもありますし、またデメリットもございます。しかし、GAPもしくはGAP的な試行の枠組み、こういったものに関しては、それなしではもう済まされないような時代の趨勢になっております。

では、どんなGAPが必要なのか。仮に今ここに空からぴかぴかに飾られた完璧なGAPが私たちの前に落ちてきたとしても、我々生産者がそれを使わなければ、単なる絵にかいたもちでございます。私は生産者の立場からそれだけは強く言っておきたいと思います。農産物をつくるのは我々生産者、それを食べるのは私たちも含めた消費者でございます。その農産物は土・泥から生まれてまいります。土から生まれた農産物と同様、この日本に導入されるべきGAPも、土や泥の中で、実際の圃場で、現場第一主義で練り上げられなければ、絵にかいただけのもちになれば、私たち生産者が使わないGAPであれば、全く意味のないものになるかと思えます。

本日は、さまざまな立場で御活躍されている第一線の方々の御講演を賜ることは私には非常にうれしいことでございます。そして、きょうここに集まってくださった皆様方、ぜひこの会合に主体的に参加していただき、そもそもGAPとは何かという根本的な問いにまでさかのぼって自分で考えていただいて、きょう帰るときには、主体的な考え方、方向性を身につけてお帰りになっていただきたいと、このように願って開会のあいさつにかえさせていただきます。（拍手）